帝塚山大学現代生活学部紀要　第５号　23～32（2009）

中世における粽伝承と年中行事―室町期食文化の周辺―

小林美和・冨安郁子

今日においても端午の節供にちなむ食物として、広く親しまれている粽の歴史は、相当に古い。『和漢三才図会』所引の中国梁時代の古典籍『続斉諧記』によれば、粽の起源は、次のようである。

> 湖南省汨羅に身を投げた屈原を悼んで、楚人は命日になると竹筒に米を入れ、屈原を祀っていたが、漢建武年間になると、自ら屈原と名乗る人物が現れ、自分を祀るときは、楝の葉で筒の上を塞ぎ、色糸でくくってほしい。そうすれば、水中の蛟竜が近づかないから、と述べた。

すなわち、粽は、５月５日に命を絶った屈原の祭祀に因んで、水中に棲む蛟竜を避けるため即ち魔除けの機能により、その起源が説かれている。

日本における粽については、

> ちまきはチガヤ（茅）、アシ（葦）、マコモ（真菰）、ササ（笹）などの葉で、モチ米やウルチ米粉の餅を包み、蒸したり煮た食べものである。(略)ちまきの名は古くに「茅巻」と書くように、チガヤで巻いたことに由来するが、今日では主にササの葉を用いる。カヤはその旺盛な繁殖力から神霊が宿る植物、邪悪を祓う草と信じられ、それで巻いたちまきは災厄疫病を祓う食べものとされてきた[注1]。

という解説が当を得ていると考えられる。

日本において、端午の節供に、菖蒲葺きや薬玉の奉納とともに、粽を食する習慣は、相当に古く、『師光年中行事』所引の『宇多天皇御記』には、「五月五日色粽」とあり[注2]、宇多天皇の頃から宮廷歳時として５月５日に粽を用いていたことがわかる。しかし、中国伝来のこの行事が、日本の宮廷歳時として取り入れられたことは疑いを得ないとして、それがどのように民間に流布していったか。そのあたりの事情は、それを証するに足る史料が少ないだけに、必ずしも自明とはいえない。このような観点から、本稿では、主に室町期から近世にかけての粽と年中行事に関する諸資料を参観、当時の状況を分析することにより、粽をめぐる食文化研究の一端となればと考える。

１．『貴船の本地』にみる粽と年中行事

室町時代後期の制作と考えられる室町時代物語『貴船の本地』からは、粽と年中行事の関わりを説く当時の民間信仰の一端を窺うことができる。『貴船の本地』は、京都洛北の地にある貴船神社の縁起を述べた鬼の物語である。すなわち、都の貴族、三位中将と鞍馬の奥に

京都大学蔵本「きぶね」

ある鬼国の娘との恋が実って、二人は幸福に暮らすが、それに怒った娘の父鬼の大王は、日本国を滅ぼそうと来襲する。それを知った朝廷は、陰陽の博士に占わせ、鬼封じの対策を練る。それが、今日の節分や五節供行事の起源であるとするものである。諸種の貴船の物語の中で、室町期の姿をとどめている慶応義塾図書館本『貴船の物語』[注3]によって、以下に、行事と行事内容およびその意味するところを表にしてみる。

行事	行事の内容	行事の意味
節分	・３石５斗の豆を煎り、鬼の眼を打つ。 ・魚を焼く。	鬼の撃退
正月７日	・若菜を摘み、七草を四方に奉る。 ・「ふしのまとう」を煎る。	・「ふしのまとう」は鬼の眼
３月３日	・桃の花を酒に入れて飲む。 ・草餅を食う。	・桃の花は鬼の眼 ・草餅は鬼の身の皮
５月５日	・菖蒲を酒に入れて飲む。 ・粽を食べる。	・菖蒲は鬼の角と髪 ・粽は鬼の髻（もとどり）
７月７日	・麦を食べる。	・麦は鬼の腸
９月９日	・菊の花を酒に入れて飲む。	・菊の花は鬼の眉毛

一番上段の行事は今日の節分行事に繋がるものであるが、注目すべきは、五節供の行事すべてについて、行事における食品を鬼の体の一部に擬えて、それを服することにより鬼を調伏できるとしている点である。それとともに、これらの呪法の発案者が７人の陰陽博士だとする点にも注意したい。

次に、同じ作品であるが、成立年代がやや下る丹緑本『貴船の本地』[注4]についても、その内容をみておきたい。

こちらも室町期の『貴船の物語』と大同小異であり、これらの年中行事がすべて鬼の調伏

と関係づけられている点に際立った特徴をみせている。

行事	行事の内容	行事の意味
節分	・３石３斗の豆を煎り、鬼の眼を打つ。 ・魚（鰯）を焼き、家の門口に刺す。	・鬼の撃退 ・魚は鬼の頭
正月７日	・七草を三宝に奉る。 ・門松、羊歯、譲葉、炭頭を門口に掛ける。	・門松は鬼の墓標 ・羊歯は鬼のあばら骨 ・譲葉は鬼の舌
３月３日	・桃の花を祝う。 ・草餅を祝う。	・桃の花は鬼の眼を抜き、酒に入れて飲む意味。 ・草餅は鬼の肉を食う意味。
５月５日	・粽を食べる。 ・菖蒲を酒に入れて飲む。	・粽は首を剥いで食う意味。 ・菖蒲酒も同じ意味。
７月７日	・素麺を食べる。	・素麺は鬼のししむら。
９月９日	・菊の花を祝う。 ・栗を食う。	・これまでと同じ意味。

いま一つ、『貴船の本地』諸本の中から、江戸前期成立とされるケンブリッヂ・フォッグ美術館寄託本『きふね』[注5]の五節供記述を整理しておきたい。

行事	行事の内容	行事の意味
節分	・鬼の目つきのヒイラギを刺す。 ・大豆を炒って、「鬼は外、福は内」と唱えて大豆を打つ。	鬼の撃退
正月 正月７日 正月15日	・表には松竹、内には注連縄 ・譲葉 ・羊歯 ・芋頭 ・子供に毬杖を打たせる。 ・「唐土の鳥は…」と唱えながらナズナを食う。 ・左義長	 ・譲葉は鬼の舌 ・羊歯は鬼の背骨 ・芋頭は鬼の首 ・毬杖の球は鬼の眼 ・ナズナは鬼の筋 ・左義長は鬼の火葬
３月３日	・蓬を服す。	・蓬は鬼の「なふとな」
５月５日	・粽を食べる。 ・子供の印地打	・粽は鬼のたぶさと名付け、ねじ切って食する。 ・鬼の国を攻撃する訓練
７月７日	・索麺を食す。	・索麺は鬼の腸
９月９日	・菊の花を酒に浸し飲む。	・菊の花は鬼の舌

ケンブリッヂ・フォッグ美術館寄託本の特徴は、行事の記述がやや詳しいことであろう。たとえば、節分の夜や七草粥の唱えごと、正月の毬杖、左義長などにも言及している点に目新しさが見られる。しかし、その根幹は、節供の飲食物を鬼の身体の一部に擬え、それを食することにより、鬼を調伏するという発想にある。５月５日の粽に関していえば、鬼の髻(慶応本図書館本)、茅・笹を剥いて食べるところから鬼の首を剥ぐ意（丹緑本)、鬼のたぶさ（フォッグ美術館寄託本）などとしている。

以上のような伝承は、室町時代の民間信仰の一端を伝えるものとみることができるが、それでは、ここにみられる一見奇異で荒唐無稽な伝承が、この時代の社会にあってどの程度の普遍性を持つものなのかを問う必要があるであろう。すなわち、孤立した特異な伝承にとどまるのか、それとも室町時代から近世にかけて民間にある程度流布し、これら行事にかかわる由来説話としての実体を持ち得たかどうかという点である。また、それとともにこうした伝承が成立する背景についても考えてみる必要があるであろう。

この点を解く鍵を握るものとして、嘉吉６年（1446）に成立した類書『壒嚢鈔』がある。類書とは、当時の百科事典の類であり、『壒嚢鈔』は、観勝寺（真言宗）の僧侶、行誉の編になるものである。この『壒嚢鈔』の記事に『塵袋』記事を加えて、近世初頭に成立したのが『塵添壒嚢鈔』20巻である。

さて、この『壒嚢鈔』五節供・節分記事[注6]には、『貴船の物語』に類似する内容がみられ、先行文献として注目される。まず、節分行事のいわれについては、次のように記している。

宇多天皇の時、鞍馬の奥僧正谷美曽路池（みぞろがいけ）の傍の穴に棲む藍波惣王という鬼神が都に乱入したという報を得た朝廷は、７人の陰陽博士に対策を諮った。その結果、３石３斗の大豆を煎り、鬼の眼を打ち、鯉を焼き串と名付けて、家々の門に刺すこととなった。これが、節分の夜に大豆を打つ因縁である。

ここに示される内容は、殆ど前述の『貴船の本地』に重なるものといってよい。また、両書の記述に鞍馬寺の毘沙門天信仰との関わりがみられるところからも、これらは同根のものと考えてよいであろう。とすれば、『壒嚢鈔』が、この節分記事の典拠とする「或古記」が、現存『貴船の本地』に先行する貴船神社の縁起であったことは想像に難くない。

次に、前掲の表に倣って、『壒嚢鈔』の五節供記事の内容を以下に示す。

行事	行事の内容	行事の意味
正月１日 （安楽の相を表す）		
３月３日 （気病を除く）	・桃の花を美酒に浮かべ、これを飲む。 ・これを門戸に掛ける。	・病患を発しない。 ・鬼魅が入らない。
５月５日 （毒虫を除く）	・菖蒲を屋上に葺く。 ・茅を蛇の形に巻いた粽を食す。 ・菖蒲根を酒に入れ飲む	・自国、他国からの毒虫が多くこれを防ぐ。 ・衆病を除く
７月７日 （瘧鬼を除く）	・麦餅（麦索）をべる。 ・索麺を食す。	・瘧病を離れる。 ・索麺は鬼の腸、食すれば瘧病を病まず。
９月９日 （長寿のため）	・菊花を服す。 ・菊花を酒に入れ飲む	・菊花は鬼の眉 ・万病を去り、長命を受ける。

ここに記される内容は、『貴船の本地』のそれと相当に近いものがあり、ことに、索麺は鬼の腸、菊花は鬼の眉などとする点は、同一の発想に基づくものと考えるべきであろう。し

かし、本書は、終始五節供を鬼祓いと関係づけて説く『貴船の本地』に比して、五節供を専ら厄病祓いの行事であるとする点において、若干の相違を示している。また、粽に関していえば、それを蛇の形に見立てている点などに特徴がある。

いずれにしても、『貴船の本地』に示される年中行事と食文化の相関は、すでに『壒嚢鈔』に類似の伝承がみられることに注目しておく必要がある。それは、当時の社会にあって、『貴船の本地』の伝承が、必ずしも特異なものではなかった状況を示唆するからである。

京都大学蔵本「きぶね」

2．蘇民招来説話と粽

室町時代物語の中に祇園神社(現八坂神社)の縁起を説くものがある。『祇園牛頭天王縁起』と呼ばれるものがそれである。狩りに出た牛頭天王が巨端（こたん）長者に一夜の宿を求めるが拒絶され、貧しい蘇民将来宅を訪れたところ、茅の筵の上で粟の飯の饗応を受ける。後に、巨端の一家は牛頭天王によって滅亡させられ、蘇民将来の眷属を名乗る者は天王の加護を受ける。また、巨端を呪詛した者は、天王の眷属としてこれを守護するとしている。

さて、この『祇園牛頭天王縁起』にも、前述した『貴船の本地』や『壒嚢鈔』でみた五節供と食文化との関わりが記されていることは注目に値する。すなわち、巨端呪詛の儀式が五節供の行事の由来であるという主張である。いま、文明本『祇園牛頭天王縁起』[注7]によって、食に関わる内容を中心に示すと次のようである。

この表に示した内容を見るかぎり、『祇園牛頭天王縁起』と『貴船の本地』および『壒嚢鈔』

行事	行事の内容	行事の意味
正月十五日内の行事	・節酒を作る。 ・「あたたけ」というかき餅 ・前の膳（白餅と赤餅）	・節酒は巨端の血の色 ・かき餅は巨端のふぐり ・白餅は巨端の骨、赤餅は巨端の身の色
3月3日	・草餅を食す。 ・桃の花。	・草餅は巨端の身の皮 ・桃の花は巨端の肝
5月5日	・粽を食す。 ・菖蒲	・粽は巨端の髻（もとどり） ・菖蒲は巨端の髪
6月1日	・正月の白い餅を食す。	・餅は巨端の骨

の発想がきわめて近いことが明らかであろう。ことに『祇園牛頭天王縁起』と『貴船の本地』の関係は、前者における巨端（こたん）を後者における鬼に置き換えれば、ほとんど同じ伝承と考えてもよいといえる。この点は、ほぼ同様の内容を持つ、近世の刊本『祇園御本地』[注8]において、より明瞭な五節供の由来説話となっている。

行事	行事の内容	行事の意味
正月元日	・門松にむすび炭 ・赤白の鏡餅 ・七草粥を食す。	・門松は巨端の墓標、炭は巨端葬送の火炉 ・七草粥は不動明王の7把の髪
3月3日	・草餅を食す。	・草餅は巨端の耳舌
5月5日	・粽を食す。 ・菖蒲	・粽・菖蒲は巨端の髪
7月7日	・索麺を食す。	・索麺巨端の筋
9月9日	黄菊の酒を服す。	・黄菊の酒は巨端の肝血

室町期に制作されたこれらの作品に共通するのは、五節供の行事を疫病退治の方法としている点であろう。『貴船の本地』における鬼も、『祇園牛頭天王縁起』における巨端も疫病もしくは疫神の擬人化されたものである。近代医学の未発達なこの時代にあって、人々に最も恐れられたのは、疫病や流行病の存在であった。そして、その対処法として、季節ごとの節供における食の慣わしが広まっていったのは、栄養や健康の観点からも決して根拠のないことではないであろう。

祇園祭で有名な祇園社（八坂神社）の祭神はよく知られるように素戔嗚尊であり、それは神仏習合により、牛頭天王と一体のものと見なされた。牛頭天王は中国の辟邪神天刑星の属性を持っていた。天刑星とは、道教の神で、疫神をとって食うと信じられていたことから、怨霊退散、疫病除去の効があるとされた[注9]。室町時代成立の『釈日本紀』所引の『備後風土記』逸文には、再び蘇民将来の家を訪れた武塔神（牛頭天王）が、その家族を茅の輪を付けて疫病から守った後、自らは素戔嗚尊であると名乗り、「後世疫病が流行する時、蘇民将来の子孫と言って、腰に茅の輪を付ければ、疫病を免れさせる」と述べたという記述がある。今日、祇園祭に際して、「蘇民将来之子孫也」と記した護符を貼り、粽を軒先に吊るすのは、

これに由来するという。祇園祭は風流囃子物による疫神遷却の祭りであり、鉾や作り山は疫神の依り付く座であった[注10]。

このように、粽と疫病退散の関係は、祇園信仰においても明らかである。また、堺市北三国ヶ丘町所在の方違神社は、例年５月31日に粽祭が行われることで知られる神社である。即ち、葦の葉で埴土を包んだ粽を授かれば、方位からくる災いを免れるものとされ、陰陽道の方違信仰と粽の密接な関係を示している[注11]。社伝によれば、崇神天皇８年12月、疫病の蔓延により、死亡者が続出する事態を収拾すべく、茅の繁茂する湿地に、当神社を創建したと伝えられる。祭神を素戔嗚尊とするところからも、疫病神としての性格が強い。当社では、６月30日に夏越祓・茅の輪くぐりの神事も行われており、蘇民将来が素戔嗚尊の教えにより、茅の輪を腰につけることで疫病を免れたという伝承がみられる。いうまでもなくこれは、これまでみてきた蘇民将来説話そのものである。この方違神社の信仰からは、陰陽道と粽、陰陽道と疫病退散の関係が明瞭に見てとれる。すなわち、『貴船の本地』に登場する７人の陰陽博士は、物語上の仮構された登場人物というにとどまらず、こうした信仰の源流を指し示すものとみるべきであろう。

堺市方違神社の例が示すように、陰陽師系の唱導者が各地に蘇民将来説話を伝播し、そこに粽が一要素として加わっていたという可能性は高い。柳田國男[注12]は、佐渡島の年中行事として、５月節供の粽を食べるときに、「こたんの太夫の首取」ったと唱え、６月１日の歯固めの餅の行事においては、「こたんの骨を噛む」と唱えるという習俗を紹介している。柳田は、この「こたん」とは鬼の謂いであるとし、さらに蘇民将来説話に登場する巨端将来に由来すると説いている。

ここに示される佐渡島の習俗が、先に紹介した『祇園牛頭天皇縁起』の内容と関係するものであることは、疑いを得ないであろう。そして、これは、陰陽師系の唱導者によって伝播された蘇民将来説話が、各地の鬼払い、魔よけの行事に取り込まれていった道筋を物語るものといえるであろう。

柳田國男は、また『海南小記』[注13]において、沖縄本島国頭村の大折目という祭におけるコバ餅の習俗、或は、島尻地方における鬼餅の習俗（12月８日）について記している。このコバ餅について、柳田は本土における茅巻・笹巻と同じものとし、鬼餅については、蒲葵もしくはサニンの葉で餅を包むとし、これを以って、「鬼を退治した古い嘉例に遵」ったものと紹介している。また、この日蒲葵で鬼の形を作り、これを門戸に懸けて「邪魔」を祓うという『琉球国記』の一説を掲げている。これらの例は、本土から遠く離れた沖縄の地においても、粽の呪力を以って鬼を払おうとする習俗が広まっていたことの証拠といえるであろう。

３．道喜粽とその背景

中世末期から近世にかけて粽作りの名匠として、名を馳せた家に川端道喜家がある。井原西鶴は、６月16日に行われる嘉祥の日に食す菓子として、二口屋の饅頭や虎屋の羊羹ととも

に、道喜の笹粽を挙げている（『諸艶大鑑』）。また、貞享２年刊の『京羽二重』[注14]には、「粽屋」の名として、「烏丸四条下ル町　津田近江」の名とともに、「烏丸新在家上ル町　道喜」の名が示されている。さらに、『雍州府志』[注15]巻六土産門上には、烏丸土御門の渡辺氏道喜、道和の２家を以って角黍（粽）の「第一、第二」としている。ことに道喜家は、内裏に「餅粢」を献上することを日課とし、時々は粽をも供するので、この粽を「内裏茅巻」と称したとしている。それは、「粉色清潔」、「風味淡美」で他家の追随を許さないとする。また、同書では、粽の語源について、茅で包んだ形が牛の角に似るところから角黍といい、茅で包む故に茅巻というなどと記す。さらに、道喜家の笹粽には、洛北鞍馬山の笹を使うともしている。

その内裏粽の実体については、近世の菓子製法書『古今名物御前菓子秘伝抄』[注16]によれば、

　粳の上白米をできるだけ細かく粉にし、湯でこねて大きく丸め、十分にゆでて水を切り、臼で搗き、さて、ちまきほどの分量をとって笹の葉で巻き、また湯に入れて煮る。

という、きわめてシンプルなものであった。『雍州府志』が「粉色清潔」、「風味淡美」とする所以がここにあるのであろう。

さて、この川端道喜家の歴史を記したものに、『川端道喜文書』[注17]がある。その伝によれば、その祖先は嵯峨天皇の後胤にあたり、渡辺氏を名乗った。京都南郊の鳥羽に住し、長く北面の武士を勤めた。その系図の箱書には「川端氏者、渡辺右舎人綱之嫡流也」とあり、大江山の酒呑童子や茨木童子といった鬼退治で有名な渡辺綱を彷彿とさせる人物名が登場する。そして、初代道喜に至る川端家の人物名称は、

　……綱―久―安―直―聞―収―堅―伝―重―親―継―進―道喜

というように、全て一文字名であり、世にいうところの渡辺党の系図に他ならない。渡辺党は平安末期から中世にかけて、大坂渡辺の地を拠点として活動した武士集団であり、彼等が周辺一帯の漁業権を握る大江御厨の供御集団の統括者であったことは有名な事実である。この家系がいわゆる鬼退治の英雄として世に喧伝されるようになったのは、南北朝以後のこととされる[注18]が、この川端道喜家の系図は、多分に鬼退治の家としての渡辺氏を意識したものと考えられる。また、南北朝時代にその原型がなったとされる酒呑童子の正体が、「都に猛威をふるう疫神、とくに前近代日本の疾病中、最大の脅威であった疱瘡をはやらせる鬼神」[注19]であるとすれば、当家において、鬼祓いの呪具としての一面を持つ粽が製造された背景が浮かび上がってくると考えても、あながち的はずれとはいえないであろう。

この家系は、すでに述べたように、京都南郊鳥羽の地に住していたが、後柏原天皇の時代すなわち渡辺進のときに、同村の中村五郎左衛門を女婿に迎えたが、五郎左衛門は後に入道して道喜と名乗った。この道喜が永正の頃、鳥羽の地を後にして、京都内裏に近い新在家に住み、餅を商うを業とするようになった。川端の名は、その家が御所の外を流れる川端にあったことから付けられたものという。年代的にやや矛盾する点もあるが、中世末期、川端家が餅の業を以って、京師に名を馳せていたことは、諸種の記録から明らかである。いま、それらを詳述することは避けたいが、一つ問題としたいのは、この川端道喜家が京都南郊鳥羽の

地の出身であるとする点である。

鳥羽の地は、山城国紀伊郡の平安京真南の一帯を指し、現在は京都市南区上鳥羽と伏見区下鳥羽に分かれている。桂川と鴨川の合流点に近く、低湿な平野を形成するこの地には、鳥羽津が置かれ、平安京羅城門から南に直進する鳥羽の作道が貫通するなど、古来水陸交通の結節点として京郊の要衝であった[注20]。そして、川端家の祖先が代々この地に居を構えたとうのは、故ないことではない。中世以降、摂津渡辺を根拠地とする渡辺党は、渡辺の地と淀川上流に位置する鳥羽を結ぶ淀川水系一帯に強力な基盤を築いていた。例えば、この鳥羽の地に袈裟と盛遠の物語が伝わるのは、その登場人物たちが鳥羽にゆかりの渡辺党の一族であったからである。鳥羽の地が渡辺党の拠点の一つであったという歴史的事実は動かないであろう。そして、問題は、ここを出自とする渡辺氏川端道喜が、京に出て、鬼神（疫病）退治の呪力を持つとされる粽製造を始めたという点である。そこには、南北朝以降、鬼鎮めを以って家の業としてきた渡辺党の血脈をみてもよいのかも知れない。川端家が、『貴船の物語』に鬼の出入り口とある鞍馬山の笹をその粽の材料とした点も、これと関わるとすればあまりにも牽強付会に過ぎるであろうか。

4．おわりに

以上、粽にかかわる伝承を中心に、室町時代物語に登場する年中行事と食の儀礼の関係を、いずれかといえば民間信仰的側面との関わりから考えてみた。近代以前にあって、疫病は絶望的なほどの猛威を揮い、人々を恐怖に陥れるものであった。それは、当時の人々の目には、まさに鬼神の跳梁跋扈と映じたに違いない。その意味で、本稿で示した、種々の年中行事と食儀礼の関係は、多分に宗教的であり、奇怪な世界観の表象という一面を持つものであるが、同時に、食物の力によって健康を保とうとする中世の人々の生活の知恵を指し示すものでもあった。

なお、鬼と五節供の食事の関係については、本来人間の五体や五臓を陰陽五行説によって説く陰陽道の教義にふれる必要があるが、本稿では、そこに言及することは、差し控えた。

注１　渡部忠世・深澤小百合『もち（糯・餅）』法政大学出版会1998年刊。
注２　山中裕『平安期の年中行事』参照。1972年塙書房刊。
注３　横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』第四、角川書店1976年刊による。
注４　注３に同。
注５　奈良絵本国際会議編『在外奈良絵本』角川書店1981年刊による。
注６　笹川祥生他編『塵添壒嚢鈔・壒嚢鈔』臨川書店1968年刊による。
注７　横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』第三、角川書店1976年刊による。
注８　横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』第三、角川書店1976年刊による。
注９　八坂神社編『八坂神社』学年社1997年刊参照。

注10　河内将芳『祇園まつりと戦国京都』角川書店2007年刊。

注11　『年中行事辞典』東京堂出版1958年刊による。

注12　柳田國男『新たなる太陽』定本柳田國男集13巻。

注13　柳田國男『海南小記』定本柳田國男集１巻。

注14　新修京都叢書第２巻、臨川書店1969年刊による。

注15　新修京都叢書第10巻、臨川書店1968年刊による。

注16　以下の紹介は、『日本料理秘伝集成』巻16同朋舎出版1985年刊の口語訳による。

注17　国民精神文化研究所編『立入宗継文書・川端道喜文書』1937年刊による。

注18　高橋昌明『酒呑童子の誕生』中央公論社1992年刊。

注19　注18に同。

注20　吉川弘文館『国史大辞典』「鳥羽」項等参照。